

act1

舞台後方、壁面中央にスクリーンが貼ってある。

映写機から流れるレトロ調のカウントダウンムービー、③、②、①…。

※白黒の映像

ウエディングドレスを着た圭人と希望がヴァージンロードを歩いている。

ウエディングドレス姿の圭人がウエディングドレス姿の希望と指輪の交換をしようとする。

※カラーの映像

部屋で寝ている圭人がガバッと布団から起き上がる……夢のようだ。

映像が消え、舞台に照明が灯る。

個室タイプの居酒屋。

中央にテーブルが置かれ五脚の椅子が置かれている。

圭人と大地と希望が中央の三席に座っている。

テーブルの上にはお酒の入ったグラスやデカンタ、オードブルが置かれていて談笑している。

圭人：ちょっとトイレ行ってくる

大地：さっき行ったよな

希望：調子悪いの？

圭人：混んでたんだよ

大地：そうか？

希望：女子は空いてたよ

大地：圭子ちゃん女子トイレに行って済ませてきなよ

圭人：変な事言うなよ！

圭人は立ち上がり部屋を出ていく。

大地：怖、あいつ酔ってんのか？

希望：そんなに飲んでなかったけど

大地：希望も大変だな……

希望：呼び捨てすんな

大地：圭人は良くてオレはダメなの？

希望：うん、ダメ

大地：なんで？

希望：大地は幼なじみじゃないじゃん

大地：オレとお前の仲だろ

希望：どんな仲よ

大地：……圭人が好きなんだろう？

希望：はあ？バカじゃない？

大地：バレバレだっつうの

希望：いつから知ってたの？

大地：高校ん時。なんであいつは気づかないふりしてんだろって

希望：関係壊したくなかったんじゃない？

大地：幼なじみの？

希望：うん

大地：告ったことは？

希望：ないよ…私と圭人の関係が崩れちゃって、光一との関係までおかしくなるのいやだったし……そういえば光一

圭人が部屋に戻ってくる。

圭人：悪い、悪い

大地：今度は混んでなかったか？

圭人：…

大地：なに？

圭人：なんでそんなに棘があるんだよ

大地：そんなことねえよ

圭人：酔ってんのか？

大地：それはお前だろ？

希望：ちょっとやめなよ

圭人：…

大地：飲めるか？

デカンタを差し出す

圭人はグラスを持つ。

グラスにワインを注ぐ大地。

主人：そういえば光一同窓会来なかったな

大地：ちょうどその話してたんだよ、同窓会は来れないけど二次会には来るって言ってたぞ

希望：忙しいのかな？

大地：バイトしながら音楽続けてるってさ。大変なんじゃないのか

主人：あいつ凄いな

大地：音楽が恋人だってラインがきたぜ

主人：変わってないな、あいつは

部屋の外から声が聞こえる

光一：この部屋っすね？

ドアが開き、ギターケースを持った光一が部屋に入ってくる

光一：よう！

思い思いに声を掛ける主人、大地、希望

主人：久しぶりだな！

光一：おお！圭ちゃん！

拳と拳を合わせる光一と大地。

光一：変わってねえなあ、お前は

希望：光一！

光一：のぞ、元気にしたか？

希望：うん

希望は空いてた椅子を引いて、光一を誘導する

大地：とりあえずビールだろ？

光一：わかってんなぁ、お前！

大地はピッチャーのビールをグラスに注いで光一に渡す

大地：じゃあ改めて！

四人はグラスを手を持つ。

大地：再会に！

四人：カンパニー！

グラスを合わせる音。

暗転。

Act2

スポットライトが当たり椅子に光一が座っている。

ギターのチューニングをしながら

光一：何にすっかなぁ

ギターを弾き始める光一。

ザ・ブルーハーツ「チェイン・ギャング」

を弾き語り始める光一。

光一が弾き語りを続けている間、スクリーンには白黒の静止画が映し出される。

※静止画

圭人と希望が手を繋ぎ歩く姿と二人の笑顔。

光一が教会の入り口を見つめている姿。

希望と圭人が歩くを後ろから見つめている光一。

※演奏が終わると同時に静止画も消える。

大地、圭人、希望は拍手や歓声をあげる。

ギターをケースにしまい席に戻る光一。

光一：流石だろ？

圭人：久しぶりに聞いたけど、やっぱ良いな

希望：凄く上手くなってたよ！

光一：上手くは褒め言葉じゃないなあ…オレは心で歌ってっから

希望：でたよ

光一：お前らに褒められると嬉しいよ

大地：お前カラオケでトップバッターのくせにバラード選ぶタイプだろ？

光一：なんでよ

大地：良かったけどさー、オーラスでーす！お疲れ様でしたー！みたいな雰囲気になってんじゃん！

笑う圭人、希望、光一。

大地：まだまだ帰さないからな！お前も！お前も！お前も！もちろん俺もだ！

再び笑う四人。

入口から女性の声が聞こえる。

女性：すみませーん！

大地：はーい！

光一：もしかしてうるさかったか？

圭人：ギター弾きながら熱唱したからな

希望：大地君謝ってきてよ

大地：なんでオレが？

希望：いいからいいから

大地：こういう役ばっかだな！

小走りで入口に向かいドアを開ける大地。

大地：すみません！静かにするんでー

女性：やあ！

部屋を覗き込む女性。

女性：やっぱりそうか

大地：お前…何しに来一

部屋を覗き込む女性。

女性：久しぶり！

部屋に入ってくる女性。

希望：リサ！

光一：よう

圭人は顔を横に向ける。

大地も黙って席に戻る。

希望：座りなよ！

リサ：お邪魔じゃなければ

大地はそっぽを向いて電子タバコの電源を入れる。

光一はリサにここに座れと空いてる席に向け親指を指す。

顔を横に向けたままの圭人。

笑顔の希望。

席に座るリサ

リサ：久しぶりだね、みんな！

希望：本当！

リサ：圭人くんも元気にしてた？

圭人：うん、まあ元気だったよ

希望：圭人とリサって高校時代なんか絡みあった？

リサ：いや、一度話をしたんだよ

圭人：一度だけね

大地：オレは一度も話したことねえな

圭人：リサは何でここに？

リサ：今日は仕事で色々あって、ちょっと飲みたい気分でき。そしたら聞き覚えのある歌声がしたから覗きにきたんだ

大地：便所は空いてたか？

リサ：見てないな

希望：圭人が、さっき混んでたからトイレ出来なかったって

リサ：なんで私に聞くの？

大地：お前はどっー

圭人：おい！

大地を制す圭人。

雰囲気戸惑いを隠せない希望。

圭人：なんの仕事してるんだ？同窓会にも来てなかったよな

リサ：同窓会

希望：連絡いかなかった？

光一を見るリサ。

光一とリサは視線が合う。

リサ：私はね LGBT の人達への支援活動をやってるんだ

舌打ちする大地。

リサ：マイノリティの人達が安心して暮らしていけるようにその手伝いしてる

希望：リサは…

リサ：レズビアンだから

大地は大きくため息をつく。

希望：高校の時から言ってたね

リサ：だってこういう私に産まれてきたんだから、隠す必要ないだろ？

大地：海外で産まれて、海外で育ったからそう言えるんだろ

リサ：それもあるかもね

大地：ここは日本だ

圭人は箸を左手で持ちオードブルを食べようとする。

リサ：圭人君は左利きだろ？

圭人：ああ

リサ：左利きの割合と LGBT と感じる人の割合って同じ位なんだけど、左利きだからおか

しいとか、それを隠さなきゃいけないとかおしくないかい？

大地：日本じゃ昔は左利きも矯正されたけどな

リサは聞き流す。

リサ：左利きだと差別されたり、ハラスメントにあうのは当然かい？

大地：…

リサ：当然ではないよね？

大地：そうだな。でもこれってそういう話？

大地は電子タバコのスティックを交換する。

リサ：大地君

大地は電子タバコを吸い込む。

リサ：わたしのことが嫌いかい？

大地：なんだよ急に

リサ：私がレズビアンだから？

大地：オレはストレートだけど、そういう奴らが嫌いなわけでも偏見がある訳でもねえよ

リサ：じゃあなんでストレートだけどって前置きしたの？無意識の中にある差別の現れじゃないの？オレはそう思われたくないっていう

大地：違うね！

リサ：何が違うの？

大地：お前にオレの何がわかんた？

光一：なあ、リサ…大地は本当は大学に進学するはずだったんだ

大地：やめろよ

光一：いや、言わせてくれよ。でも高三の時、それまで女手一つで育ててくれたお袋さんが倒れて…それで大地は進学も音楽も諦めて就

職したんだ。そういう優しい心を持った大地が人を差別したりするわけがない

リサ：優しい人なんだね…少し言い過ぎた。謝るよ

大地はリサを見ずに返事する。

大地：気にしてねえよ

リサ：でもさ、これってそういう話？

大地はリサに視線を合わす。

リサは視線を逸らさない。

希望：ねえ大地くん、お母さんは元気？

大地：何とかね

リサのスマートフォンが鳴る。

スマートフォンの画面を確認して立ち上がるリサ。

リサ：ちょっとごめん

席を離れ、四人に背中を向けて電話にでるリサ。

リサ：もしもし、うん、今ハイスクール時代の友人と会っててさ。うん、大丈夫。わかった。愛してるよ。じゃあまた後で。」

リサリサは電話を切り席に戻る。

リサ：彼女から電話だったよ

主人：彼女？

リサ：いま同棲してるんだ。結婚を前提に考えてる

主人：結婚できるのか？

リサ：今の日本では出来ないよ。戸籍を作って親子になるか、どっちかの籍に入って姉妹になるか…

希望：それしか方法はないの？

リサ：公正証書を作って法的に効力のある書類にして作成するとか…愛し合っていたとしても、愛とか絆は目に見えないから。目に見えないものだけじゃ…不安なんだよ

希望：リサって

リサ：なに？

希望：ううん。ただ、リサに対するイメージが変わった

リサ：どんなイメージだった？

希望：もっと強くて…

リサ：何事にも怯まない？

希望：そう、そういう感じ

リサ：そうしてないと自分に負けてしまうし…人からそう見えてないと、同じ状況で助け

を求めてる人達の力にはなれない気がして

リサはニコリと微笑み。

リサ：こう思う時があるんだ。この世に神様がいて、神様がこの世の中を創り出したとしたなら……私達が神様の祝福を受けてこの世に生まれてきたんだとしたら……私は私。あるがまま生きていいって

圭人：どうしてそう思う？

リサ：神様はミスをしない

リサは四人を見渡す。

リサ：せっかくの二次会なのにこんな雰囲気にしちゃってごめん

光一：気にすんなよ。来るなり場をしんみりさせる曲を歌う人間もいるくらいだから

大地：自分でいうなよ

リサ：なにか場を盛り上げるゲームをしないかい？それでみんなを盛り上げてから帰ることにするよ

光一：いいじゃん

リサ：向こうにいた時はホームパーティーの時によくやってた

光一：どんなゲーム

リサ：Truth or dare ってゲームなんだけど

希望：初めてきいた…ルールは？

リサ：簡単だよ。Truth or dare、誰も知らない秘密にしている自分の真実を告白するか、何かに挑戦するか

光一：真実か挑戦かで…Truth or dare ってことか

リサ：その通り。そして真実を告白するか何かに挑戦した人は次にやる人を指名出来る。簡単だろ？

大地：誰からやるんだよ？

リサは真顔。

リサ：言い出した私からやるよ。大地君スタートコールをしてよ

大地：どうやって

リサ：Truth or dare って言うだけ

大地：やるとは言ってねえだろ

リサ：つまらなかつたらやめればいい！

大地：……Truth or dare

リサ：挑戦を選ぶよ……私はこれから希望ちゃんにキスするよ

大地：は？

リサ：挨拶程度のヤツさ。軽くキスするだけだよ

圭人：やめろ！！

大地：どうした？

圭人：そんなこと人前でやることじゃない！

スクリーンにウエディングドレス姿の圭人と希望の姿のフラッシュバック。

圭人：彼女いるんだろ？

リサは希望に近づく。

リサ：ゲームだよ、圭人君。ただのゲームじゃないか

圭人：ゲームですることじゃないだろ

リサ：希望ちゃんだって驚いてるよ

リサが希望の頬に触れてキスしようとする。

大地：待てよ

動きを止めて大地を見るリサ。

大地：順番を変えてくれよ、リサ

リサ：順番で？

大地：オレが先にやる

リサ：いいよ

大地：そしたら次にやる人も指名出来るんだったよな？

リサ：クリアできればね

大地：スタートのコールを

リサ：Truth or dare

大地：Truth……誰にも言っていない真実を話す

リサ：いいねえ

大地：リサ、オレはお前のことを見るのも嫌だ

リサ：知ってたよ

大地：そうやって知ったかしてないと海外ではイジメられんのか

リサ：私がイジメられてたって？

大地：虚勢を張って大きく見せてないと差別されんのか？

リサ：…

大地：お前を見てると思い出したくないことを思い出してしまう

リサ：君も虐められてた？

大地：小学生の頃、家族四人で暮らしてた。お前らは知らないだろうけど、オレには歳の離れた兄ちゃんがいてな。オレは兄ちゃんが大好きだった。ベースをやり出したのも兄ちゃんの影響だ。その日も学校から帰ったらベースを教えてもらおうと思ってた。ちょっとした悪戯心だったんだ。兄ちゃんをびっくりさせてやろうと思って、そうっと兄貴の部屋の襖を開けて中を覗いたんだ。兄ちゃんは何をしてたと思う？

リサは左右に首を振る。

大地：口紅をつけてた。鏡の前でうっとりするような顔で。兄ちゃんは送別会の仮装だとか色々言ってたけど、オレにはなんとなくそれが嘘だとわかってた。その日の夜中、目が覚めると親父と母ちゃん、そして兄ちゃんが言い合いしてた。オレに見つかったからもう隠しきれないと思ったんだろ

光一：大地の兄ちゃんは

頷く大地。

大地：親父はお袋に怒鳴ってた。お前の育て方が間違ってたんだって、兄ちゃんにはそんな恥ずかしい格好で外に出るなって…たまにしか家に帰って来なかったくせに

リサ：大地君…

大地：お前はオレに無意識の差別じゃないか？って言ってたよな

頷くりサ。

大地：毎日お袋も兄ちゃんもなじられてたよ。殴られてたこともあった。そんな時でもお袋は兄ちゃんにこう言ってた。どんな姿をしていても私の子供だって。お前は私のかわいい子供で宝物なんだって。オレもお袋と同じ気持ちだよ。女だとしても男だとしても、オレの大好きな兄弟で大好きな家族なんだ。オレが差別だって？…誰にも何も言わずに兄貴は家を出て行った…親父は更に母ちゃんを責めて…耐えられなくなった母ちゃんは親父と離婚した。オレは迷うことなく母ちゃんについて行った…母ちゃんは体も弱くなってたのに一生懸命働いてオレを育ててくれた。貧乏人ってバカにされて虐められたこともあ

ったけどな

リサ：お兄さんは？

大地：どこにいるのか…生きてるのか死んでるのかもわからない…オレはこう思うんだ…あの時オレが悪戯なんかしようとしなければって…兄ちゃんの部屋を覗いたりしなかったら、兄ちゃんはまだ一緒に暮らしてたんじゃないか？って。母ちゃんもあれほど親父から責められはしなかったんじゃないか？って。思い出すんだよ、あの日 三人が喧嘩してたことを。オレが悪かったからだって

リサ：それは違うよ

大地：お前に対する態度はお前がレズビアンだからとか、偏見や差別があるからじゃない…オレは親父とは違う。ただ、お前を見ていると思い出すからなんだ。オレのせいで家族がバラバラになってしまったことを…

リサ：自分を責めないで。君が差別的な人間だなんてもう思っていない。色々な意見があつて良いし、それが多様性のはずだ…それに君は悪くない

大地：オレを赦してくれ

リサ：君は悪くない

光一：大地…すまん

リサ：ゲームはもうやめよう

大地：…まだ続けよう。オレが指名できるはずだ

リサ：本当に大丈夫なのかい？

大地：ああ…オレが指名するのは、お前だ

大地は希望を指さす。

希望：えっ？

大地は希望を見つめる。

頷く希望。

大地：真実か？挑戦か？

希望：…真実を

希望：圭人…私と圭人と光一…小さい頃からいつも三人で一緒にいたけど、私…圭人のこと

圭人：希望、やめよう。それ以上は言っちゃダメだ

希望：どうして？

圭人：今ならまだ間に合うよ、それ以上はやめよう

大地：聞いてやれよ

希望：……私、圭人がずっと好きだった。子供の時からずっと

圭人：……

希望：こういう時じゃなかったら言わなかったと思う。だって圭人は私のことをそんな風には見てないから。圭人は優しいから気を使ってくれてたんでしょ

圭人：……違う

希望：これはゲームなんだから、忘れて！これまで通り仲のいい幼なじみでいよう。ちゃんと……諦めるから

圭人：そうじゃないんだ

希望：どういうこと？

圭人：……オレも好きだったよ、ずっと昔から。希望の気持ちだって気づいてなかったわけじゃない。けど、言えなかったんだ

希望：うん。でもそれは圭人が優しいから…

圭人：違うよ。そんなことじゃない。希望が思ってるみたいに三人の関係が壊れるからとかそういうことじゃないんだ……オレに聞いてくれよ

希望：何を？

圭人：真実か、挑戦か。ゲームを続けよう

希望：真実か？挑戦か？

圭人：真実を……オレ、ずっと黙ってたことがあって。身体は男なんだけど…心の中は女なんだ。なのに……好きなのは女なんだ。希望のことは好きだよ。けどそれは男としてじゃなく女として…希望、君のことが好きなんだ。オレさ、男用のトイレに行きずらくてさ

大地：トイレから誰もいなくなるまで

圭人：うん。でもいずれは体も女性になりたいって思って色々調べたりはしてるんだ……おかしいと思うだろ？

希望：おかしいとは思わないよ

リサ：わたしってそんなにおかしい？

大地は口に指を当てて静かにのポーズをする。

手をあげるリサ。

圭人：だからさ…忘れろよ。オレのことは

希望：それが真実なの？

圭人：そうだよ

希望：違う、諦めろよっていうのが圭人の本当の気持ちなの？

圭人：普通の人と一緒になれよ。その方が良い

希望：普通って？

圭人：オレみたいなのじゃなくて普通の人だよ

希望：圭人は普通じゃないの？

圭人：オレは……

希望：圭人は圭人で何も変わってないよ

圭人：オレみたいな人間とは一

希望：自分で自分を差別するのはやめて！圭人！真実を話して！

圭人：オレは…希望と一緒にいたい

希望：それだけ？

圭人：オレと一緒に居てくれよ、希望…

圭人を抱きしめる希望。

暗転。

Act3

舞台に照明が灯る。

大地がトイレから戻る。

大地：そろそろ帰るわ

希望：今日はありがとう

大地は手を上げて答える。

大地は出口へ向かう。

圭人：大地！

大地：どうした？

圭人：また飲んでくれるか？

大地は出口へ歩を進め、立ち止まる。

大地：その時はまた五人で飲もう。なあ、リサ

リサ：お邪魔じゃなければ

大地は笑みを浮かべ部屋を出ていく。

希望：私達も帰ろうか

圭人：そうだね

リサ：何か困ったことがあったら連絡してね。いつでも力になるよ

希望：ありがとう

リサ：圭人君も

圭人：ありがとう

リサと握手する圭人。

希望：光一またね！

圭人：今日は会えて嬉しかったよ

光一：オレもだ

希望は圭人へ手を差し伸べる。

その手を握る圭人。

手を繋いで出口へと向かう二人。

リサ：仲がよろしいことで

照れながら出ていく二人。

リサと光一だけが席に座っている。

出口を見つめている光一。

リサ：ねえ、光一君

光一：なに？

リサ：君は、私を呼んで何がしたかったの？

光一：……

リサ：本当は何か伝えたいことがあったんじゃないの？

光一：別に

リサ：高校時代、圭人君とも話したことがあったけど、君とも話したことがあったよね

光一：なんの話もなかったよ

リサ：でもー

光一：何もなかったよ

リサ：そっか……なら良いんだけど

光一：……

リサ：私もそろそろ帰るよ

リサは部屋を出る直前、光一の方を振り向いて。

リサ：光一君はゲームやらなかったね

光一：ああ

リサ：フェアじゃないな…みんな真実を選んだから、君は挑戦してみたらどう？

光一：どんな？

リサ：…例えば今から好きな人に電話して告白してみるとか

光一：オレは音楽に恋してっから

リサ：……じゃあ、また

光一はリサに手を上げる。

部屋を出ていくリサ。

一人の席に残る光一。

光一：好きな人に電話ね

暗転。

スクリーンにカラーの映像で帰り道の光一の姿。

人気のない夜の街を歩いている。

光一は足を止めスマートフォンの画面を見る。

光一：好きな人に電話して告白。

光一はスマートフォンを操作する。

光一のスマートフォンの発信画像が映る。

「圭人」

終